

お題の再設計

こんにちは、菅俊一です。今回も、みなさんといっしょに手を動かして考えていきたいと思います。さっそくですが、A4の紙の上にAとB、2つの点をまず置いてください。そのうえで、AとBの2つの点を辿れるように線をつないでみてください。いかがですか？ たとえば図1のような感じになると思います。

ここで今度は立場を変えて、「辿る側」という視点で、いま引いてもらった線を見てみるとどうでしょう。確かにAとBは問題なくつながれていますし辿ることはできますが、いささか単純すぎて、辿る側としてはおもしろみに欠けるような気がしてきますね。それでは、もう少しだけお題を調整して工夫してみましょう。

「A4の紙にAとBの点を定め、2つの点の間を辿っていてどこかおもしろさを感じるような線のつなぎ方を考えてみてください」としたらどうでしょう。少し難しくなりましたが、いくつか考えてみてください。

たとえば、私が考えてみたのは、Aから出た線がいったん●に到達して、別の●からBに向かうというワープを使ったつなぎ方（図2）や、線が紙の外に出てまた入ってくるつなぎ方（図3）など、直接つながずに、物理的に移動やジャンプをさせてしまうという辿り方です。

価値を付加する工夫を

冒頭に紹介した線とは異なり、線を辿っていくプロセスそのものに、どこかおもしろさや喜びに似たようなものを感じませんか。今回は、2つめのお題で「おもしろさを感じる」という条件を追加しました。おそらく最初の「ただ線をつないでください」というお題だけでは、工夫して2点をつなごうとは、考えもしなかったと思います。もちろん、最初のお題で普通に直線や曲線を用いて2点をつなぐことは、条件どおりでまったく間違っていない。しかし、社会に新しい価値を生み出すときには、この条件に書かれていない、誰も明言していないところで、あえて工夫してみたり価値をつくろうと考えることができるかが重要になってきます。

社会で行なわれている仕事の多くは、今回の冒頭のような「線をただつないでほしい」というような条件で提示されることがほとんどです。線をつなぐだけでも役に

Vol.28

机の上の小さな変革



立てたり問題を解決したりすることはできますが、多くの人は難しさを覚えることなくできてしまい、その作業を記憶に留めることはないでしょう。今回の2つめのお題のように「おもしろく感じる」といったような追加要件を自ら設定していくことで、他の人とは異なる価値を入れていくことができるようになります。

このように、与えられた問題に対して、自ら再解釈して問題を設計し直すことで、普段の仕事のなかでも新しい価値を加えたり示したりすることができるかもしれません。

図1

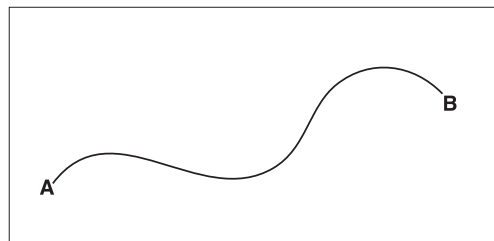


図2

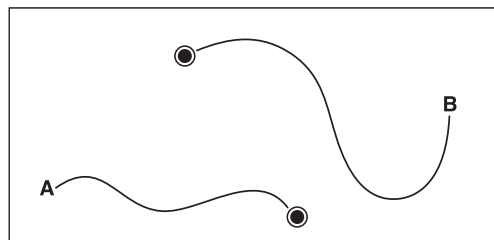
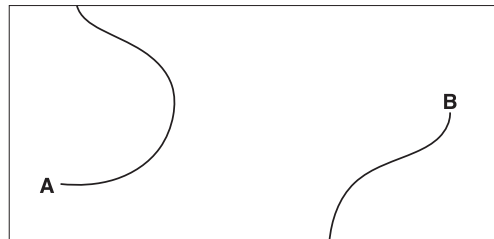


図3



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。